様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：32517
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520147
研究課題名（和文）　英語圏における伝承バラッドの研究—録音文化としての展開

研究課題名（英文）　A study on traditional ballads in English speaking countries: their developments as audio recordings.

研究代表者
高松　晃子（TAKAMATSU AKIKO）
聖徳大学・音楽学部・教授
研究者番号：20236350

研究成果の概要（和文）：バラッドと呼ばれる英語圏の物語歌は、ローカルな口頭伝承が廃れる一方で、録音文化に浸透することで新たな伝承ルートを獲得しつつある。この研究では、20 タイトルのバラッドについて 2001 年以降の録音をできる限り収集し、歌詞と旋律の傾向を調べた。録音文化に独特なのは、広く支持された演奏が現れるとそれが一種の手本となって伝えられることである。それは地域を越えて伝承されるが、録音文化内部で細分化された音楽ジャンル（たとえばエレクトリック・フォーク、カントリー、ロック）を越えることは容易ではないようだ。

研究成果の概要（英文）：Ballads are the songs that tell the stories.　The oral transmission of the ballads has gradually declined but they found the new route in the audio recording settings.　In this research, audio recordings since 2001 of 20 titles have been collected as many as possible and examined carefully in terms of texts and tunes.　What is unique for recorded material is that once widely accepted is the specific version it will be transmitted far beyond the geographical boundary.　In another word, that version becomes a paradigm accepted everywhere.　Even though the paradigm can be widely transmitted, it seems to be still difficult for it to go beyond the boundary of each fractionalized category (ex: electric-folk, country, rock, etc) within the popular music.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般
科研費の分科・細目：音楽学
キーワード：音楽、バラッド、録音、伝承、英語圏

１．研究開始当初の背景

研究対象であるバラッドとは、欧米各地で口頭により伝承されてきた物語歌である。従来のバラッド研究は、文学的見地から行われることが多かった。音楽が注目されたのはようやく 20 世紀も半ばになったころである。

家庭や地域といった比較的狭い範囲で口頭により伝承されてきたバラッドは、1950年代初頭の米英に始まったフォーク・リヴァイヴァルを経て、フォーク・クラブや演奏会、および録音といった新しい演奏の場を獲得した。リヴァイヴァル以降、バラッド歌唱は職業歌手のパフォーマンスとして録音文化に浸透し、録音は現代における有効な伝承形態となっている。にもかかわらず、商業ベースに乗った録音は学術的な研究の対象と見なされることが少ない。録音文化を、不特定多数に開かれた新たな伝承のきっかけとして積極的に評価したいという発想が、本研究の出発点であった。

２．研究の目的

1950 年代以降、英語圏のバラッドが口頭文化から録音文化へ移行する過程で、録音が新たな伝承の源となりつつあることを踏まえ、録音文化におけるバラッドの歌詞と旋律が、どのような形に収斂または拡散する傾向にあるのかを明らかにする。

３．研究の方法

(1)アメリカのバラッド研究者チャイルドが収集し番号を付したいわゆる「チャイルド・バラッド」（全 305 曲）から、演奏頻度の高い 20 タイトルを対象曲として選定

(2)各タイトルについて 2001 年以降の録音資料を収集、録音リストを作成

(3)演奏ヴァリアントの分析

①歌詞については聞き取りからスタンザのパラダイム分析を経て語りの特徴を抽出、チャイルド版、ブロンソン版の歌詞ヴァリアントと比較して録音版の傾向を調査

②旋律については採譜、旋法と音域および旋律輪郭による分類、ブロンソン版のヴァリアントとの比較を行って録音版のチューン・グループの傾向を調査

(4)録音版が新たな伝承を生む現状を踏まえ、録音版と口頭伝承版の接続可能性について考察、提言する。

４．研究成果

(1)対象曲は以下の 20 曲である。

①*Lady Isabel and the Elf-Knight*　イザベルと妖精の騎士
②*Willie's Lady*　ウィリーの妻
③*The Twa Sisters*　二人の姉妹
④*The Cruel Brother*　残酷な兄
⑤*Lord Randal* ロード・ランドル
⑥*Edward*　エドワード
⑦*The Cruel Mother* 酷き母
⑧*The Three Ravens*　三羽のカラス
⑨*The Twa Corbies* 二羽のカラス
⑩*Tam Lin*　タム・リン
⑪*The Twa Brothers*　二人の兄弟
⑫*Sir Patrick Spens*　サー・パトリック・スペンス
⑬*Fair Margaret and Sweet William*　マーガレットとウィリアム
⑭*The Unquiet Grave*　眠れぬ墓
⑮*The Wife of Usher's Well* アッシャーズ・ウェルの女
⑯*Bonny Barbara Allan*　バーバラ・アラン
⑰*Geordie*　ジョーディ
⑱*Lord Thomas and Lady Margaret* トマスとマーガレット
⑲*The Sweet Trinity [The Golden Vanity]* スウィート・トリニティ号（ゴールデン・ヴァニティ号）
⑳*Trooper and Maid* 騎兵と娘

(2)これらについて、以下のデータを作成した。

①2001 年以降の録音リスト
②対象曲の概要
③歌詞に関して、チャイルド版との異同表と観察シート
④歌詞に関して、スタンザ分析表と観察シート
⑤チューンに関して、ブロンソン版との異同表と観察シート
⑥音楽に関して、アレンジ観察シート

以上の作業から明らかになったことを記す。

(3)演奏ヴァリアントの傾向について

①歌詞について

①-1　長さ

ほとんどの録音が 7 分以内となっているが、それは CD という録音媒体の親和性を考慮した結果と考えられる。スタンザ数も 15 を越えるものは少なく、チャイルド版に掲載されたヴァージョン（たいへん長い版がある）とは大きく異なる。

①-2　意味内容の整理

チャイルド版、ブロンソン版と比較して、録音版の方に、意味内容が合理的に整理されているものが多いとは必ずしも言い切れない。説明不能な展開や、不合理な言い回し（伝統的なクリシェ）も残っている。現代の聞き手に特段配慮しているとは言えない。

①-3　多様化か、均一化か

②-1 に述べるような理由で、録音版におけるスタンダードがタイトルごとに決まってきているという点で、均一化傾向にある。そ

のような版は概して、内容的に筋がとおっておりわかりやすく、物語として形が整っている。

②旋律について
②-1　拡散か、収斂か
　録音版には、ブロンソン版にないヴァージョンが豊富に存在する。したがって、外見的には拡散傾向にあるように見える。
　ただ、ブロンソン版にないヴァージョンといっても、まったくのオリジナルは皆無である。その理由として、誰かがある段階で新しいチューン（その歌い手がもともと知っていたがブロンソン版には掲載されていなかった組み合わせ）を採用し、それがヒットして次々とカヴァーされることが考えられる。それまでの伝統とは異なるチューンを採用したある特定の録音がスタンダードとなり、それが受け継がれる傾向が見られるのである。そう考えれば、録音版で使用される旋律の種類は収斂傾向にあると言える。
②-2　音組織
　概して旋法は保持される。和声による伴奏が付いたとしても、長短調に吸収される傾向は見られない。

③音楽のアレンジについて
③-1　歌詞内容の補完
　歌詞は従来の伝統的な形式を保ち、その結果、物語の展開が不明瞭になる場合があるが、音楽面でその欠点を補っていると考えられる。それはたとえば、話のまとまりを示す間奏を挿入したり、クライマックスで音量を上げたり、描写的な表現を用いたりすることによって行われる。
③-2 ジャンルの細分化
　それぞれの演奏は、その演奏が属するジャンル（フォーク、ロック、カントリーなど）ごとにおおまかな特徴を共有している。
③-3 単調さとその克服
　録音版の演奏は単調になりがちである。ひとつの理由は、バラッドという詩の形式固有の問題（多くの連の反復をいかに処理するか）であり、もうひとつの理由は、ポピュラー音楽の様式（ダイナミクスやテンポの微妙な変化に無関心で、ビートも固定されがち）にある。それらが、多様な演奏を生むきっかけとなっている。
　反復の単調さを避けるために、連ごとに旋律線以外のアレンジを変えていくか、歌詞のない部分で旋律よりも器楽の伴奏部分や声楽アンサンブルのアレンジを工夫することで変化をつけている。
③-4　意味上のわかりにくさの克服
　現代社会に生きる人々にとって、伝統的なバラッドの歌詞は、意味が不明瞭だったり物語の進行がわかりにくかったりすることが多い。録音版における諸楽器の使用は、意味上のまとまりを強化したり、説明を補ったりするために機能することがある。すなわち、無駄を省き、わかりやすさを優先する語りの試みが、音楽の助けを得ていっそう効果的に表現されていることになる。

(4)録音版が新たな伝承を生むこと、録音版と口頭伝承版の接続可能性について
①バラッドは、フォーク、ロック、カントリーなど、ポピュラー音楽のさまざまなジャンルに居場所を見つけて発展し、さらにジャンルどうしの接触がカテゴリーの細分化や同化を促した。
②録音が仲介するワールドワイドな伝承環境においては、すでに録音されたチューン、特に、著名な演奏者によって録音されたチューンが影響力をもつ。さまざまなチューンとそのヴァリアントが細々と伝承される口頭文化とは違って、ある特定の演奏がスタンダードとなり、伝承されてゆくと考えられる。
③しかしながら、曲の出自は依然として「トラディショナル」と標記するのが通例である。それは、カヴァーやコピーをする者にとって正当なエクスキューズとなるだけでなく、自由な自己表現を保障する積極的な意味合いをもつ。

(5)新たな問題
①重層的な主体
　伝統的な歌唱の場において、歌い手は物語を伝える、いわば伝達者の立場にあれば基本的には充分であった。その場合、バラッドの詩が語り手によって語られるようなら語り手に、登場人物によって語られるならその登場人物の立場に立つわけである。
　ところが、歌唱の場がステージや録音に移り、歌い手がアーティストとしてのアイデンティティを獲得した場合には、自己を透明化して伝達者の立場に身を置くことは困難になる。そこでは、ひとりの人間としての自己とアーティストとしてのアイデンティティ、さらにはバラッドの語り手や登場人物への自己投影といったように、アイデンティティの重層化が起こる。

②クロスジェンダード・パフォーマンスの生起
　さらに興味深いのは、多層に形成されたアイデンティティの中にジェンダー不統一が見られるケースである。
　歌い手の性と歌中の主体の性が一致しない現象（クロスジェンダード・パフォーマンス=CGP）は、従来、英米語のポピュラーソングにはほとんど見られなかったが、口頭伝承の流れを汲むバラッド歌唱では、チャイルドやブロンソンの版にも、また、1950 年代

以降の録音においても、3 割前後の割合で出現している。
　本研究の過程で行ったインタビューによると、歌い手が伝達者の立場を取れば取るほど、そして聴き手が伝統を熟知していればいるほど、パフォーマンスの文脈は「伝統的」になり、CGP が否定されにくいことが推測された。逆に、歌い手がアーティストとしての自己を尊重し、聴き手が伝統を熟知していない場合には、CGP が回避されやすい。

③ 伝統歌からポピュラーソングへ
　本研究において、バラッドが今まさに伝統歌からポピュラーソングへと移行途中にあることを再確認するに至った。これからその傾向にさらに拍車がかかり、また、インターネットを通じて聴き手（＝未来の作り手）と歌い手の性質が一層細分化されるであろう。

④　今後の課題
　インターネットの配信動画などを含む新たな場における伝承の研究が必要である。「伝達者」ではなく「表現者」としての歌い手の志向や、予備知識を持たない新規の聴き手側の受容が、どのような伝承を生み出すのか、注目される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
①高松晃子　「英語圏のバラッド歌唱におけるジェンダー交差について」、『音楽文化研究』査読有、12 号、2013、1- 10 .
http://www.seitoku.ac.jp/daigaku/music/bltn/bltn12/takamatsu12.pdf
②中島久代　「ゴシシズムと模倣―The Monkとバラッド詩」、『九州共立大学研究紀要』査読有、1 号、2011、43-49.
③高松晃子　「ポピュラー音楽としてのバラッド―越境と拡散、その先にあるもの」、『音楽文化研究』査読有、10 号、2011、1-11.
http://www.seitoku.ac.jp/daigaku/music/bltn/bltn10/takamatsu10.pdf
④高松晃子　「伝承バラッドの新たな地平」、『音楽文化研究』査読有、9 号、2010、1-15.
http://www.seitoku.ac.jp/daigaku/music/bltn/bltn9/takamatsu9.pdf

〔学会発表〕（計 3 件）
①高松晃子「スコットランド音楽史概観―アートとフォークのインタラクション」、『シンポジアム：スコットランドの音楽』日本カレドニア学会大会、2012 年 9 月 30 日、神奈川県立国際言語アカデミア.
http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/newspdf/News_46.pdf（シンポジアム要旨と高松発表要旨）
②高松晃子　「バラッドの伝承―空間の移動と変容する音楽について」、『シンポジウム：バラッドの音楽』日本バラッド協会第４回会合、2012 年 3 月 24 日、聖徳大学.
http://j-ballad.com/note/72-2012.html（シンポジウム報告）
http://j-ballad.com/note/70-2012-09-04-06-37-53.html（高松発表）
③TAKAMATSU Akiko
British traditional ballads and their development as popular music.
International Council for Traditional Music. 2011 年 7 月 5 日、セント・ジョンズ(カナダ).

〔図書〕（計 1 件）
中島久代（共著）『スコットランド文学　その流れと本質』、2011、開文堂.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
①伝承バラッドの録音文化における展開 ―《酷き母》50 異本の言葉と音楽　その 1 歌詞について
http://j-ballad.com/note/53-50.html
②伝承バラッドの録音文化における展開 ―《酷き母》50 異本の言葉と音楽　その 2 チューンについて
http://j-ballad.com/note/54-the-cruel-mother.html
③伝承バラッドの録音文化における展開 ―

《酷き母》50 異本の言葉と音楽　その 3
資料編
http://j-ballad.com/note/55-the-cruel-mother-3.html
④バラッドの伝承—空間の移動と変容する音楽について
http://j-ballad.com/note/70-2012-09-04-06-37-53.html
⑤バラッドの音楽：第 4 回(2012)会合シンポジウム報告
http://j-ballad.com/note/72-2012.html
⑥魅惑の物語世界—やまなか・みつよしのバラッド・トーク http://www.balladtalk.com
⑦日本バラッド協会ホームページ（山中光義主宰）http://www.j-ballad.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
高松　晃子（TAKAMATSU AKIKO）
聖徳大学・音楽学部・教授
研究者番号：20236350

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者(22 年度)
中島　久代（NAKASHIMA HISAYO）
九州共立大学・経済学部・教授
研究者番号：90227778

山中　光義(YAMANAKA MITSUYOSHI)
福岡女子大学・文学部・名誉教授
研究者番号：20047880